

現実と古典との融合

——芭蕉作品中の「隠逸」に関する漢籍典故をめぐって——

陳 光

松尾芭蕉が俳諧宗匠生活から隠退して深川草庵を杜甫の詩に因

んで「泊船堂」と称する年代（延宝八年）から、「南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて、閑にならむこそ、老の楽とは云べけれ。……孫敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖むには」

と「閑関の説」を言う晩年に至るまで、その俳句、俳文、紀行文という一連の作品の中には「隠逸」に関する漢籍典故が大量に使用されていることが目立ち、始終中国古典からの「隠逸者」の面影が描現している。

そのような漢籍典故がいかに生かされているかを考えることによって、隠者俳人としての芭蕉が中国古来の「隠逸者」や「隠遁意識」をどのように理解し、どれほど受容しているかが分かってくるはずであり、芭蕉と中国古典との関連の側面が理解できるに違いない。

『武蔵曲』には、天和元年の作で次の句が目につく。

茅舎ノ感

芭蕉野分して鹽に雨を聞く夜哉

この句にはまた次の前番のついたものもある。

老杜茅舎破風の歌在り。坡翁ふたたび此句を倭て屋漏の句作る。其世の雨をばせを葉に聞きて、独寐の艸の戸。（禹柳「伊勢紀行」）

「鹽に雨を聞く」は「茅屋為秋風所破歌」（杜甫）中の詩句「牀頭屋漏無乾處、雨如麻未斷絕」と「牀牀避漏幽人家、浦浦移家墜子船」（連雨江漲二首・蘇東坡）を踏まえたものである。「其夜の雨」とは杜甫の「屋漏」の雨、蘇東坡の「避漏」の雨であることは明らかである。

芭蕉は、「其夜の雨」を鹽に聞くということで、古代唐・宋の詩に詠まれた雨を遠い時間と空間を超越して、現世に呼び寄せてきて「牀頭屋漏無乾處」と「牀牀避漏幽人家」の古典世界を「独

寐の艸の戸」の芭蕉草庵と結び付けて現実に再現させようとしている。そうして、老杜・坡翁に拠る古典の詩境と感触の実態と一体化した所へ自分も身を晒し、体験して「茅舎ノ感」が出来たのである。それは漢籍古典の詩境と生活実態とを、聴覚に訴える雨漏りの音で以て接合させた所の感慨である。

「其世の雨」を今に聞く、今の雨を「其世の雨」と聞くということに依る現実と古典の融合は芭蕉の発句の世界に実現された。

「野晒紀行」には

京にのほりて、三井秋風が鳴滝の山家をとふ

梅林

梅白し昨日ふや鶴を盗れし。

と見える。発句は山莊を訪ねてその主人談林派の俳隱者の三井秋風の隠逸ぶりを嘉賞した挨拶吟であるが、「梅」「鶴」を織り込んだのは、梅花と鶴を愛した宋の隠士林和靖に比した趣向からである。ところで、隠士林和靖に比して三井秋風の山莊は「梅白し」であるが、林和靖につきものの「鶴」の姿が見えないのである。芭蕉は「昨日ふや鶴を盗まれし」と主観的にその欠損を補ってまでして、古典世界の林和靖の形象に三井秋風を完全に合わせようとするように見える。現世の俳隱者を高潔な古代の隠士に比することによって古典的情趣と眼前の情景との複合が現れる。古典的

情趣への契合は現世の俳隱者の隠逸ぶりを嘉賞するためである。更に、同じ「野晒紀行」の中の一節を見てみることにする。

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町計わけ入ほど、柴人のかよふ道のみわづかに有て、さがしき谷をへだてたる、いとたふとし。彼とくどくの清水はむかしにかはらずとみえて、今もとくどくと零落ける。

露とくどく心みに浮世すがばや

若これ扶桑に伯夷あらば、必口をすすがん。もし是、許由に告ば、耳をあらはむ。

その中には伯夷と許由という中国古代の隠士が二人出ている。伯夷は周の人、姓は墨胎氏、名は元、孤竹君の子、弟の叔斉とお互いに父の後を嗣ぐことを譲って逃れる。そのうちに周の文王に身を寄せたが、武王が殷の紂を討伐することを「以暴易暴」の不義として馬を押えて諫めたが、容れられなかったので首陽山に隠栖し、周の粟を食うのを潔しとせず、武王の扶持米を退け、山菜などを常食として生活をおくり、ついに餓死した中国史上の有名な賢者隠士である。伯夷の隠逸については「立于悪人之朝、與惡人言、如以朝衣朝冠坐于塗炭」（孟子・公孫丑上）、「不降其志、不辱其身」（孔子・微子）というのがある。不正の浮き世に立つのは、正装で、泥や炭の上に座っているようなもので、たとえ、

世に隠れて生きていようと、志や操を高く保ち、いかに困窮しようとも我が身を辱め、汚すようなことをしなまいこと、

「求仁而得仁」

(論語・述而)

「古之賢者」

(論語・述而)

「伯夷聖之清者也」

(孟子・萬章下)

「聞伯夷之風者頑夫廉、懦夫有立志者」

(孟子・萬章下)

と孔子、孟子から高度な評価があったのである。許由は上古の高士、字は武仲、沛沢の中に隠れ、また堯帝が天下を譲ろうとするのを拒んで、箕山に隠れた。堯帝から天下を譲ろうと言われ、汚れたことを聞いたと、潁川で耳を洗ったというほどの高潔な士と伝えられている。

西上人の草庵の跡を訪ねて、目に見えてくる「彼のとくとくの清水」は、西行も「とくとくと落つる岩間の苔清水くみほすほどもなきすまひかな」と詠じたが、「伯夷あらば、必口をすすがん」、「許由に告げば耳をあらはむ」という芭蕉の世界との連結によって、賢者高士の志向と情操を汚す俗世間の塵を洗い濯ぐ「零」になるのである。ここでは現実の「とくとくと零落ける」清水と昔西行の詠んだ「とくとくと落つる岩間の苔清水」と重なった背景に対し、「心みに浮世すがばや」と芭蕉自身を置いた上に、更に漢籍の世界の「口をすすがん」とする伯夷、「耳をあらはむ」

とする許由を投影しようとするのである。この四重の平面の上に見える古今の立体的詩境を芭蕉の隠逸詩想が往来しているように見える。

眼前の情景と古典的世界との映し重ねの詩境を現出した例として「おくの細道」の中には

妙禪師の死関、法雲法師の石室をみるがごとし。

とある。妙禪師は、宋の原妙禪師。杭州天目山の張公洞に入り、「死関」の篇額を掲げて十五年間も出なかった。法雲法師は、梁の高僧、晩年、岩上の庵にいて終日論説したという。仏頂和尚の旧居を訪れた芭蕉は、目の前に見る石の上に岩屋を背にして造っている小さい庵と、中国の故事にある「妙禪師の死関」「法雲法師の石室」との両方に、ヒントを合わせようとしている。言い換えれば、現実の情景と故事の世界の像を重ねて見ようとするのである。それは現実と古典との二重映像であると言うことができるなら、その焦点の合った所にこそ、意識的に両方を溶け合わせようとする芭蕉独自の意図があるのである。

芭蕉の貞享元年の発句に次の句があった。

鯉釣らん李(子) 陵七里の浪の雪

子陵は、本名嚴光 字は子陵、中国後漢光武帝と幼時からの同窓且つ親友であり、光武帝即位後、諫議大夫に召されたが、官途につかず、わが姓名を変え、富春山に身を隠し、甘州桐陰県の名勝七里灘近くに独り釣糸を垂れて隠居生活をしていたと伝えられている。後世では嚴子陵の高徳を慕う詩人高士が多く、その徳風の高きを

「山高水長」

(范文正公「嚴先生祠堂」)

「使貧夫廉、懦夫立」

(范文正公「嚴先生祠堂」)

と褒めたたえている。嚴子陵の隠逸した動機については

「榮華暫時事 誰識子陵心」

(許渾「七里灘」)

「泥塗軒冕」

(范文正公「嚴先生祠堂」)

「不事王侯高尚其事」

(范文正公「嚴先生祠堂」)

などと議論がある。嚴子陵は「榮華」を「暫時事」と見、「軒冕」の富貴・權勢を「泥塗」として捨てて王侯・貴族に仕えず、隠居までして自分の志節を高尚に保つ高潔の士であると見られているのである。「熱田に移ル日」と題したこの発句における「七里」は桑名・宮(熱田)間の海路を言う「七里の渡し」を指す。七里の渡しを七里灘に擬した先例として、那波活所の「安力嚴光ノ輩

在ラン、同名七里灘」というのがある。

「七里の渡し」の「浪の雪」を望みながら、七里灘で、独り釣糸を垂れて隠居生活をした嚴子陵を目の前に浮かべる。嚴子陵に倣って「鯉釣らん」とするのは、既に人氣稼業の俳諧宗匠生活にあつまり放棄して、深川三つ股の辺りに退隠した芭蕉は古典中における世利を営まない高潔な隠者賢人の求める境地を更に求める芭蕉の心境を示している。そのような境地へ身を以て一層接近しようとする意志が現され、そこには芭蕉の古典的隠逸への憧憬が見られる。

芭蕉の延宝八年の句には

花にやどり瓢箪斎と自いへり。

というのがある。その中で芭蕉自ら号した「瓢箪斎」は、顔淵の故事や「瓢箪腰腰空シウシテ、草顔回之巷ニ滋シ」(和漢朗詠集)の詩句を踏まえたと言われている。顔淵は、名は回、字は子、春秋時代の魯国の人、孔子の高弟で、至聖、復聖の称がある。顔淵の隠逸生活の故事は「論語・雍也篇」にある次の一節を原典としてとされている。

「子曰、賢哉回也、一簞食一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。」「一簞の食一瓢の飲、陋巷に在」という生活よりは、人は「其憂に堪え」ぬところであるが、賢人顔回は、

そうした中でも道を求め、楽しむところを改めない。こうした故事から、後世では、「單食瓢飲」は、貧乏な生活状態でありながら、道を求める賢人の生活状態や、賢人が求道して、楽しむ環境として、一般化される。いわゆる賢人高士の「風雅」となるのである。隠退して「單食瓢飲」といった貧乏な状態に身を置いた芭蕉は「瓢簞斎」と自称して、顛沛の境地を体験し、その楽しむ所を一層楽しんでみるという意識があるのではないか。芭蕉は意識的に、実生活では現実を古典の世界へと、詩境では古典の世界を現実生活へと、切り換えているのだらう。

芭蕉の俳文「閑関の説」の後部には

孫敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖むには。

とある。孫敬は「孫敬は字は文室、常に戸を閉ちて、書を讀み」とある「聚求」に換ったものである。杜五郎は「顛昌の人、三十年間、門を出なかつた。」と見える。かの孫敬のように戸を閉ざし、杜五郎のように門を閉めて一步も外へ出ないことは、ここで芭蕉の行動様式の手本になり、自らへの戒めになるのである。

芭蕉の俳文「芭蕉を移す詞」の冒頭部には

菊は束籬に榮、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非にありて、世塵にけがさる。荷葉は平地にたたず、水清からざれば

花さかず。いづれのとしにや、栖を此境に移す時、ばせを一本を植。風土芭蕉の心にや叶けむ。数株の莖を備へ、其葉茂重りて庭を狭め、萱が軒端もかくる計也。人呼て草庵の名とす。

芭蕉はここで、菊、竹、牡丹などの古典に出てくる立派な草花ではなく、この草庵を覆ってしまうほど伸びたバショウによって芭蕉庵と呼ばれるようになった。すなわち芭蕉は、菊、竹、牡丹を現実のバショウとの突き合わせとして使つて、自分のわび住まいを諧謔的に述べている。芭蕉はあとで、

彼山中不才類木にたぐへて、其性尊し。僧懷素は、これに筆をはしらしめ、張橫渠は、新菜をみて修学の力とせしとなり。予其二つをとらず。唯このかげに遊て、風雨に破れ安きを愛するのみ

と唐の書家、懷素と宋の張橫渠が芭蕉を愛する原因とは違つて、伝統的な美意識（それは漢籍古典のものでもある）から切り離されたところでバショウという植物を選んだ理由を述べたのである。これは芭蕉が漢籍古典を学びつつ、新たに切り拓いていった「わび、さび」という美意識の端緒を伺わしめる。ここに漢籍古典に対する態度の一つの変換が見られる。

芭蕉は「閑関の説」の最後で、閑関の動機を明確に述べている。

煩惱増長して一芸すぐるものは、是非の勝る物なり。是をもて世のいとなみに当て、貪欲の魔界に心を怒し、溝瀝におぼれて、生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて、閑にならむこそ、老の樂とは云べけれ。人來れば無用の弁有。出ては他の家業をさまたぐるもうし。孫敬が戸を開て、杜五郎が門を鎖むには。友なきを友とし貧を富りとして、五十年の頑夫自昏、自禁戒となす。

南華老仙は、莊子と敬称される中国古代の思想家、莊周であり、南華真人と追贈される。莊周は、楚の威王が宰相に迎えようとしたが、「祭礼の犠牛として厚遇されるより汚穢の孤豚でありたい」と言つて謝絶し、山野に悠々自適した、という。莊周は理論的に広くすべての事物の成立する唯一の根本の道を探求し、人間の相対的知を徹底的に否定する絶対的無の境地を体得した。無を確定し、且つそれは、実践的には「無可有の郷に遊ぶ」ような超世俗的独立と広大な自由（遊び）であるとし、著書の「莊子」では、道家の様々な思考が混和して展開されており、脱俗的であっても、世俗順応であっても、自適が人間の眞の生き方であるとする思想、すべての物は道の流行のままに自然に展開しており、自然に任せるのが天楽であるという思想、とくにすべての物は根本でも、自然展開でも、万物一体なので、無心でこそ自然の大調和があるとする思想、「無爲にして爲さざるなし」という弁証法的論理など

の思考が、後世の隠遁、隠逸の意識へ大きな影響を与えたものである。芭蕉は世俗の煩惱にあきて「閑関」を決意するにあたって「南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて、閑にならむこそ、老の樂とは云べけれ」と言つて莊子の思想が自分に適応することを改めて確認して、それを行動の指針したのである。

上に述べてきたように中国古来の「隠逸」の典拠は、芭蕉の作品の中では現実と結び付けて使われているところが多いことが分かる。古典世界の隠士のお話で以て、目と耳による現実を感知し、自身の隠退生活の実態を描写したり、またその現実を古典の隠逸世界へ転換させたりして、古典と現実の一体化を図る。その一体化されたところで「古人の求める所を求め」、古代の隠士と共通の感慨を得ようとして自分なりの感慨や感嘆を発する。言い換えれば、その古典と現実の融合したところに芭蕉の独自の詩境、詩想、詩的作品が産出される。中国古代の隠逸思想と芭蕉を取り巻く日本の風土と融合された所に芭蕉の隠者的俳風が形成されると言えるであろう。

参考文献

- 『日本文学鑑賞辞典・古典編』 吉田裕一編 東京堂出版
- 『芭蕉俳句鑑賞』 赤羽 学著 清水弘文堂出版
- 『中国思想辞典』 日原利国編 研文出版
- 『中国古代文学理論辞典』 趙則誠 張連弟 鼎万忱主編 吉林文史出版社

版社

『日本文学史辞典・古典編』

角川小辞典Ⅱ31 三谷栄一 山本健吉

編 角川書店

(遠東外国語師範専門学校)

前 要 目

複文による連体修飾

——中古の和歌と散文との比較——
式子内親王の「うたた寝の夢」

「源氏小鏡」に関する一考察
——その梗概化をめぐる——

「寸錦雜綴」考

——非森島中良作であることを中心に——

「夢心の鯉魚」と「二世の縁」

「倭語類解」の日本漢字音と
その記載方法との関連について——

「浮雲」の破綻

「平家物語」の横笛説話と高山樗牛の『滝口入道』

遠藤周作における軽小説の意味

——「おバカさん」を中心に——

「小右記」における病氣・怪我に関する表現

発語機能から見た日本語の会話の構造

YES/NO疑問文における片寄りと否定

機能概念法と外国語教育

書評・新刊紹介

大坪併治博士著

『石山寺本大方廣佛華嚴經古點の國語學的研究』

赤羽 学著『備前海月』

赤羽 学著『芭蕉と人』

三村晃功編著『続五明題和歌集』

勢田勝弥著『連歌の新研究・論考編』

鄭 昌鎮著『進明新日本語文法』

『おもしろい進明日本語文法』

『日本語講義』

林省之介・上地敏彦著『林のらくらく古文単語』

——リズム＆マンガの281——

佐藤 一恵

見尾久美恵

増田 京子

石上 敏

宮地 弘美

成 晴慶

上村 敦之

穴吹 陽子

汐田 峰子

清水 教子

根 智恵

鄭 相哲

羅 伝倅

江口 泰生

乾 裕幸

工藤進思郎

井上 宗雄

岩下 紀之

安 允淑

藤原 勝巳